

『青森県史 資料編 考古4 中世・近世』

成瀬 晃司

近世考古学は、注目されてからまだ三十年足らずの若い分野であるが、バブル期に加速した開発事業や、城郭整備に伴い、調査件数は増加し、様々な成果が各地であがっている。その結果、文献資料、絵画資料の豊富な近世においても、考古資料からのアプローチの必要性が認められるようになった。二〇〇一年には東京を中心に研究活動を行っている江戸遺跡研究会が『図説江戸考古学研究事典』（柏書房）を刊行し、蓄積された江戸遺跡研究を集成した。また、同年、刊行された『事典しらべる江戸時代』（柏書房）においても「江戸遺跡の調査から」と題したトピックスが三十四項目取り上げられ、考古資料が近世史の一側面を担うようになってきた。

このたび、青森県より、『青森県史 資料編 考古4 中世・近世』が刊行された。自治体史の刊行は、昨今も各行政単位で盛んに行われており、考古資料編が含まれる例は多々見受けられるが、中・近世の考古資料編に限ると、刊行例は少ない。そのなかでも有田、伊万里、瀬戸、土岐、益子などの大窯業地において、窯業編もしくは陶磁器編として地域産業史的位置づけのなかで刊行されたものがほとんどを占め、純粋なる地域史の上に立った考古資料編は皆無に等しい。そういった意味でも本書が刊行された意義は全国的に大きいと言えよう。

本書の構成は、以下の通りである。

序 刊行にあたって 凡例 目次

第I部 時代概説

1. 古代から中世へ
2. 中世の考古資料
3. 中世から近世へ
4. 近世の考古資料

第II部 遺跡編

- 第1章 中世
- 第2章 近世

第III部 集成編

- 第1章 すまい
- 第2章 うつわ
- 第3章 ぐらしぶり
- 第4章 なりわい
- 第5章 おくり

用語解説

引用文献一覧 索引 図版一覧 編集後記 執筆者一覧 調査協力機関
および調査協力者一覧 青森県史編さん関係者

以下、目次に基づき、本書の紹介を行いたい。

「第I部 時代概説」では、四章から構成されているが、全体を通して、考古資料と伝世資料をうまく協合せ、歴史（地域史）を解説、特に文頭では、〇〇時代の青森県は、…で、始まり、地域史を強調した導入になっている。

導入の「古代から中世へ」では、中世の特徴を引き出すため、古代史のなかでの青森県の様相から概説し、特に考古資料では、弥生末からの流れを踏まえており、小單元毎にその時代の特徴を示す要素を掲げ、その内容を具体的な事例を用いて説明し、さらにその歴史的背景を解説している。

「中世の考古資料」では、「1. 中世の始まり」として、土鍋から鉄鍋へ、土器から陶磁器、木器へと変わる器の変化、伏屋式構造から壁立式構造への建物構造の変化、館の発生の考古資料からみた三要素の登場をその画期として定義づけている。「2. 中世の指標」では、掘立柱建物、竪穴建物、井戸、区画施設、墓の存在を遺構からみた、陶磁器の搬入、漆器・木製品、金属製品の多様化、銭貨の流入を遺物からみた中世の指標と位置付け、それらがともに種類、量が増加していく様相を中世の特徴として概説している。「3. 用途からみた考古資料」では、出土遺物の多い浪岡城跡の事例を中心に用途分類し、それらの組成から、当時の生活イメージを読者に分かり易く解説している。「4. 県内の中世遺跡」では、調査の歴年代順に県内の中世遺跡に対する取組方の変化と、主要中世遺跡の調査成果を概説し、「このような資料を考古学および文献史学の両面から検討することで、青森県の豊かな中世史を描き出せるであろう。」と、その重要性を提唱すると同時に、冒頭では調査事例が居館跡に偏在している現状を「集落遺跡が少ないのではなく、中世集落が現在の集落と重複していることや、分布調査を実施しても地表面から発見しにくい状況に起因している。」と、中世考古学研究が内包している問題点にも触れている。

「中世から近世へ」では、文献史からの時代区分論が現在においても諸説存在することを前提に、ともに武士の時代である中世と近世の様相差を発掘された遺構や遺物から、勢力圏、城館、御殿、湊の四要素を事例に比較を試みている。

「近世の考古資料」では、「1. 近世の考古資料の持つ意義」において、「考古学は洋の東西を問わず、また時代を問わず、遺構や遺物といった過去の人間活動の痕跡から、歴史の再構築を図る学問である。」と冒頭で定義づけている。ところが、近世資料に関しては「これまでの近世史研究は、伝世した豊富な古文書や絵画資料を読み解くことで進められてきた。また、建築史学は現存する古建築物を扱うことで、民俗学は伝承や伝世した民具の研究を通じて、それぞれ歴史研究の一翼を担ってきた。即ち文献史学、建築史学、民俗学、美術史学など、どの学問分野をとってみても、近世史研究は全面的に伝世資料に依拠してきたことになる。」しかし、近年の近世遺跡の発掘調査の結果、「単に伝世資料を補強するだけでなく、伝世資料にはない種類の情報が数多く含まれていることがわかってきた。」と、考古資料の重要性を訴えている。それを踏まえ、「(1) 伝世資料と考古学」では、お互いの資料の持つ長所、短所を比較し、その特徴を導き出し、「(2) 考古資料の事例」では、考古資料の意義を示す具体例を挙げ、「古文書などの伝世資料が豊富にある江戸時代といえども、伝世資料と考古資料の両方を駆使して初めて双方の資料の欠点が補われより正確で、豊かな内容を持った江戸時代像を描けることになろう。」と結んでいる。「2. 県内の近世遺跡」では、遺跡の性格に沿って概説されているが、ここでも近世遺跡を対象とした発掘調

査は、開発を前提とした緊急調査が主体であること、近世単独の遺跡を対象とした発掘調査は史跡整備に伴う城館の調査を除いて皆無に等しいこと、その城館にしてもそれと関連する城下町の調査に至ってはやはり皆無に近い、近世遺跡にとって非常に厳しい現状に触れている。遺跡から出土遺物に目を向けた「3. 県内出土の近世資料」では、「(1) 日本海交易により海路でもたらされたもの」「(2) 東北地方で作られたもの」「(3) 北からのルートで大陸から渡ってきたもの」「(4) 北海道アイヌの物質文化と共通するもの」の流通に関する四つの視点から出土遺物を分析し、県内遺跡の特徴を導き出している。

本章では、主題である中世、近世の位置づけのために、古代く中世、中世く近世を引き合いに用いている。当然、考古資料でそれを語るとき、資料が豊富な古代以前に力が注がれることは理解できる。しかし、考古資料の乏しさが容易に推測できる近代の様相に関しても、近世末期以降を考えるうえで避けて通ることはできない。仮に文献史料に依拠する形になったとしても、何らかの形で記載して頂きたかった。

「第II部 遺跡編」では、県内の中世遺跡一〇四ヶ所、近世遺跡五〇ヶ所が掲載されている。それぞれ、遺跡の位置と歴史、遺構の概要、出土遺物、遺跡の年代と性格の四単元から概説されているが、遺跡の位置と歴史では一／五〇〇〇地形図、遺跡の全景写真、過去の空中写真などによって、場所が示されている。遺構、遺物ではカラー写真をはじめ、カラー化された実測図がふんだんに盛り込まれている。さらに文末には、関連遺跡の名称と掲載ページ、報告書などの引用文献、資料保管場所が紹介されていることは、県民共有の文化財に対する意識が強く見受けら

れ、評価される。また、ややもすると専門的になりがちな実測図も彩色されたことよって一般県民にも充分イメージできるものになっている。このように、ビジュアル的要素を多く取り入れ、また遺跡名、遺跡所在地にもふりがなが振ってあるなど、随所に読者を考えた構成となっており、収録された遺跡の概要が容易に理解できるインデックスとしての評価は高い。

「第三部 集成編」は、「すまい」、「うつわ」、「くらしぶり」、「なりわい」、「おくり」の五章によって構成され、発掘事例を中心に分かり易く説明されているが、その調査事例の偏りなど、考古資料では説明が充分にできない項目に関しては、文献資料を織り交ぜて解説されている。

「すまい」では、発掘事例が豊富な城館跡がやはり中心になる。県内の中世城館の分布を示し、各城館の機能を曲輪の配置に基づいて分類し、さらに城館構成と、諸施設から各々の特徴を説明している。特に御殿に關しては、中世における寝殿造から書院造への変化、中世と近世との構造比較から、それぞれの特徴を分かり易く紹介している。また、港湾都市である十三湊の区画構造を比較資料に揚げ、城館との区画構造の違いが明示されている。

「うつわ」では、「中世の陶磁器と変遷」「近世の陶磁器とその変遷」で、中世、近世を各々三期に区分し、各時代の指標となる陶磁器を掲げ、器種組成、産地組成の変化から各年代の特徴を抽出し、中・近世全体の様相を紹介している。年代が下るに従って器種、産地ともに多様化し、読み手としては力のいる項目である。「四耳壺とルソン壺」「カワラケと北日本」では、四耳壺とカワラケをトピック的に取り上げ、それぞれの

出土様相の変遷から時代背景に迫っている。

「くらしぶり」では生活関連資料のうち、「木で作られた道具」「暖房具・灯火具」「飲酒」「喫煙」「化粧」「戦の道具」「蝦夷袴の腰刀」「喫煙の風習と中世の茶道具」「出土する文房具と墨書資料」を取り上げ、出土資料を用途分類し、それぞれの資料に關し、構造、形態、製作技法、材質、用法を中心に紹介している。「飲酒」では儀礼的宴会から日常生活文化への浸透にいたる飲酒形態の変化を出土資料から述べるとともに、「焼酎徳利」などの出土様相から青森県を取り巻く流通ルートと地理的要因に、「喫煙」では十七世紀初頭に出土事例がある「土製パイプ」に注目し、県内における喫煙習慣の普及との関連にも目を向けている。

「喫煙の風習と中世の茶道具」では、日本における喫煙の歴史を概観し、青森県内における中世の喫煙の様相を位置付けている。しかし、資料の制限からか近世の喫煙に關して全く触れられていないのは残念である。

「なりわい」では生業関連資料のうち、「糠部の駿馬」「八戸藩・盛岡藩領内における密造銭」「貝塚から探る中世・近世の魚撈」「中世における鉄器の製作とその普及」「堅穴建物跡とその性格」「肥前名護屋城と津輕氏・南部氏の陣屋」「鍛冶・鑄造の道具と遺構」「悪土焼の特徴」「埋めた銭」を取り上げ、特に「糠部の駿馬」では、国内における馬の歴史と奥羽地方における馬産と「糠部駿馬」を概説し、出土資料を合わせて馬と人間の関わりについて紹介、「貝塚から探る中世・近世の魚撈」では、下北半島に集中する近世貝塚の出土資料を通し、漁具から対象海産物や漁獲方法について、自然遺物の特徴から下北半島における漁業の特徴と生活相について概観している。「中世における鉄器の製作とその普

及」では、出土した鉄生産関連資料の形態、組成、成分などの分析を通して、素材の流通、技術の伝播と融合などの努力によって、近世以降、我が国有数の鉄造りの産地にまで発展した背景を推察している。

「おくり」では、「近世の墓」「中世の墓」「埋納遺構」「信仰の道具」を取り上げているが、全体を通し資料紹介にとどまっている感が否めない。そのなかでも、近世墓に関して、埋蔵文化財として保護されている中世墓と、民俗学の対象にもなり、墓地の維持管理が継続している近世末以降の墓との狭間に位置し、そのつながりを把握するために重要な役割を果たすと提言されていることの意義は大きい。

本章では、出土資料の一般的説明に終わることなく、県内外はもとより、広くは東アジア的視点にて比較・検討を行い、本州最北端地域としての特性を導き出していることに、単なる概説書ではなく、青森県史としての特性がよく反映されている内容である。

以上、駆け足で本書の内容を紹介してきたが、本書が対象としている読者（一般県民）にとつて、県内各地の遺跡事例は、国政、県政レベルの歴史と違い、そこから読みとれる歴史は、自分たちの地域史に繋がる身近な存在である。しかし、当然ながら一遺跡の資料から歴史を読みとることは困難であり、時空間を始めとする様々な角度からの検討が必要である。本書では、編集後記にも書かれているように、方法論・研究姿勢の提示↓基礎資料の紹介↓問題点・研究成果の提示と、一連の流れで構成され、「もの」である考古資料を地域史との関わりのなかで、歴史を構成する一要素に昇華させている。その結果、読者にとつては、文字資料などでは得られなかった地域史の様相を発見することができるであ

ろう。

さらに、本書全体にわたり、写真、イラストを中心とした豊富なカラー図版によるビジュアル的仕様や、各章のポイントを掴みやすく見やすい配慮がされた、小見出し状キーワードなど、読者にとつて分かり易く、気軽に利用できるような配慮が多々見受けられ、それらが本書を「生きた県史」に仕立て上げている。

最後に、本書に掲載された考古資料のほとんどが、開発に伴う事前調査によって、遺跡の命と引き替えに我々が得た情報であり、掲載された貴重な遺跡の多くはすでに存在していない。それを思うと複雑な気持ちになるのは、評者ばかりではないだろう。このような状況は、これからも続くであろうし、それどころか近年の文化庁から出された答申では、近世遺跡はその地域にとつて重要とされるもの以外は、調査の必要性がないと定義づけられ、城郭を除く近世遺跡を発掘調査の対象外と位置づけた自治体も多いと聞く。考古資料は、宝探しではない。様々な遺跡を調査することによって、出土した遺構、遺物の有する意味、そしてその遺跡の性格をはじめて位置付けることができるようになる。そのためには、全ての遺跡が重要な意味を持つことは、当然であり、そこに遺跡の優劣が存在することはあり得ない。

本書は、地域史と埋蔵文化財の密接な関係とその成果を広く県民に知らせるパイプ役であり、県民の財産として埋蔵文化財の保存と、有効な活用を考えると、その担う役割は大きい。同時に、近世考古資料を正面から扱った本書は、青森県において近世遺跡が埋蔵文化財の保護対象として位置付けられていることをも意味し、今後の県内における埋蔵文

化財行政のあり方に大きな期待を寄せるものである。

(A4判、七一〇頁、青森県、二〇〇三年三月)
(なるせ・こうじ 東京大学埋蔵文化財調査室助手)